

あとがき

本書は、2013年12月13日、14日の両日に開かれた、上智大学創立100周年記念シンポジウム「人の移動と地域統合：高度人材獲得に向けたEUの地域戦略——アジア・日本への示唆——」を契機に編纂されたものである。このシンポジウムは、上智大学ヨーロッパ研究所、ジェトロ・アジア経済研究所、日EU関係科研費研究グループが主催し、法務省、経済産業省、国際移住機関（IOM）からの後援をいただいた。出席者は両日とも100名を超え、盛況のうちに幕を閉じた。特に、IOM駐日事務所長のウィリアム・バリガ氏には、シンポジウムに参加していただいたのみならず、本書においても巻頭言をご寄稿いただいた。さらには、本書の刊行にあたり、同事務所からは多大なご支援をいただいた。改めて、謝意を表したい。

このシンポジウムにおいてご報告いただいた、安藤研一先生、植田隆子先生、須網隆夫先生、中村民雄先生は、本書の執筆にも快く応じてくださった。それぞれ、経済、安全保障、法律分野において今日代表的なEU研究者であることには、改めて触れるまでもないであろう。そして、この諸先生方の卓越した仕事のおかげで、学際的でありながらも各々のディシプリンどうしの関連が簡潔明瞭な、きわめて優れた論文集を世に出すことが可能となった。その手腕に感服するとともに、心から御礼申し上げたい。

また、本書の狙いは、学際的でありつつも、同時に人の国際移動にかかわる国家の役割に焦点を当てることにあった。この意味で、とりわけ日本では立ち遅れている、国際政治学（国際関係論）のアプローチによる人の国際移動研究を紹介することは重要であった。上記シンポジウムにおいて基調報告をされたジェームズ・F. ホリフィールド先生は、まさにこの分野での草分け的な存在である。研究面での成熟度のみならず、高等教育への発展の度合いという点からみても、いわゆる「マイグレーション研究（Migration Studies）」は日本よりも欧米諸国の方がはるかに発達している。しかし、欧米諸国でさえ、国際政治

学の理論を用いてこの問題に取り組む研究者は比較的少数であった。ホリフィールド先生ご自身、1992年に Harvard University Press から *Immigrants, Markets and States* を出版した際、しみじみそのように感じたと言われている。しかし、その後、人の国際移動に国家主権の問題が密接に関係していることが着目されるようになってから、国際政治学と人の国際移動の接点はますます興味深い研究テーマとして全世界から注目されるようになった。それに伴い、先生の業績はますます貴重なものと評価されるようになり、先生は2016年に International Studies Association において Distinguished Scholars Award を受賞された。本書においてホリフィールド先生の論考を掲載することができたのはほかでもない先生のご厚意のおかげであるが、これを機に、日本でもより多くの国際政治学者が扱うテーマに人の国際移動が加えられることを願ってやまない。

このほか、特に第2部においては、EU加盟国各国政治の研究者に執筆を依頼した。若松邦弘先生、森井裕一先生、坂井一成先生、清水謙氏、中井遼先生、それぞれ、イギリス、ドイツ、フランス、スウェーデン、バルト三国の政治研究の第一人者である。ここで目に留めていただきたいのは、この先生方の多くは、人の国際移動を専門とする研究者ではない、ということである。諸先生方に敢えて執筆をお願いした背景には、人の国際移動についての先行研究からは見えてこないような視点を見出していただきたい、という編者の願いがあった。特に、「序章」でも触れたように、いわゆる移民や難民の立場のみを考察の対象とするのではなく、そして、移民や難民の問題を国家権力の傲慢性の問題として無批判に片付けてしまうのではなく、彼らと、受け入れ国の国民との関係に焦点を当てることによって、移民や難民を受け入れるための政策や政治をダイナミックに描いていただくことを期待した。そして、その試みは大成功であった。諸先生方のおかげで、難民や移民の問題を、モラルや支配、搾取などの問題にとどまらない、国民形成や国家性の問題として捉えることが可能になり、結果、学問の地平が大きく開かれたと感じている。改めて、感謝申し上げる次第である。

また、同様に優れた論文を寄稿いただき、ホリフィールド先生原稿の和訳も

あとがき

引き受けてくださった、佐藤俊輔氏にも御礼を申し上げたい。佐藤氏は新進気鋭のEU人の移動研究者であり、今後ますます混迷を深めるEUの動向を、現地滞在者ならではの視点から鋭く切り込んでくれるに相違ないと期待している。

そして、今回諸般の都合により論文の収録には至らなかったものの、シンポジウムに参加いただき様々な視点から知的刺激を与えてくださった、慶應義塾大学の渡邊頼純先生、筑波大学の石川知子先生、ジェトロ・アジア経済研究所の山田美和氏、梅崎創氏、法務省入国管理局審判課長・君塚宏氏、経済産業省経済産業政策局参事官(当時)・奈須野太氏、そして、ドイツはハンブルク大学から駆けつけてくださったガブリエル・フォークト先生、ブリュッセルのEU本部からお越しくくださった、閣僚理事会事務局のパオロ・M. コッス氏にも心から御礼申し上げたい。また、同シンポジウムを成功に導いて下さった、上智大学ヨーロッパ研究所所長の市之瀬敦先生、同職員の藤代郁子氏、その他学生諸君にも心から感謝する所存である。

最後に、本書の刊行に際しては、法律文化社の小西英央氏に行き届いたご配慮をいただいた。特に、初めての編纂本であることからいろいろと気後れしていた編者は、氏から優しく、かつ頼りがいのある助力をいただいた。記して、ここにあつく御礼申し上げたい。

2015年12月

四ツ谷の研究室にて

岡部 みどり